

2005年の「ベコちゃんの森」

新年を迎えた森は相変わらずの雪景色。荒天の合間をぬっての探索でした。

2005年もまた動物達の足跡を見つけました。

この時見つけたのは、ウサギとキツネのもので、その2つはずっと平行して続いています。キツネがウサギを捕らえるために足跡を辿って追いかけているのです。

ウサギの安否がちょっと不安になる風景でした。

また、木の幹にはキツツキが開けた穴を発見しました。

このように傷ついた木々を見つげると、キツツキが悪者のように思えてきますが、実はキツツキが穴を開けるのは害虫が入り込んで弱ってしまった木や老木だけで、害虫を食べて木の生長を助けてあげたり、老木を掘って木を倒れやすくすることで世代交代を促してくれているのです。

木を倒してしまうこと＝“害”と思いがちですが、全体の流れから見れば、森の更新を促進させるための大切な働きをもっているのです。

冬の間は人間の手による整備をお休みしていますが、森は日々自らの力で環境を整えています。



【ウサギとキツネの足跡】



【木の幹に開いた穴】

3月になると積雪もだいぶ少なくなり、スノーシューがなくても歩けるようになりました。

雪を背負って鍛錬しているかのように見えるアブラチャンの芽やこここで聞こえ始めたミンサザイのさえずりが、冬の終わりを感ぜさせてくれました。



【ベコちゃんの森のようす】



【アブラチャン】

4月の森は、ずっと雪に埋もれていた木や植物たちが一気に姿を現しました。

鶯が盛んに鳴き始め、フキトウも顔を出し、本格的に春の訪れが感じられます。

しかし、森の全貌が明らかになるにつれ、たくさん雪の重みでなぎ倒された木たちも姿を現しました。

また、その周りにはササがたくさん生えています。

この状態で放っておくと、それらに地表面が全て覆われてしまい、光が十分に届かないために他の植物が生育できなくなってしまいます。

山に安全に入れるようになるこの季節、そんな事態を回避すべく森の手入れを始めなければなりません。



【リュウキンカ】



【ギンラン】

5月の森はさわやかな新緑の季節を迎え、木々も鳥たちも活発に動き始めていました。

ヤブデマリ、ギンラン、レンゲツツジなど鮮やかに花を咲かせています。

また、シンボルツリーのサワグルミも花を咲かせました。

先月の開散とした姿からあわただしく移り変わっていく森の様子には目を見張るものがあります。



【レンゲツツジ】



【ヤブデマリ】

そして、繁茂の勢いが止まらない8月。

ファミリー文化研究所の研究員有志が集まり、森の整備活動を行いました。

(活動の詳細はイベント掲示板をご覧ください。)

目の前に広がるササの群集をみんなで大汗をかきながらひたすら刈り取って行きました。

この作業がこれからの森にどんな効果をもたらすのかがとても楽しみです。

10月の森は夏の整備活動の甲斐があり、いつもの年よりも日差しが森全体に降り注いでいました。

見晴らしが良くなった森では色々なものを見つけることができました。

エゾゼミの抜け殻、スカシダワラ、オニグルミの実やウバユリの果実、マムシグサなど、夏の名残と秋の実りが共存してとても賑やかです。



【ベコちゃんの森のようす】



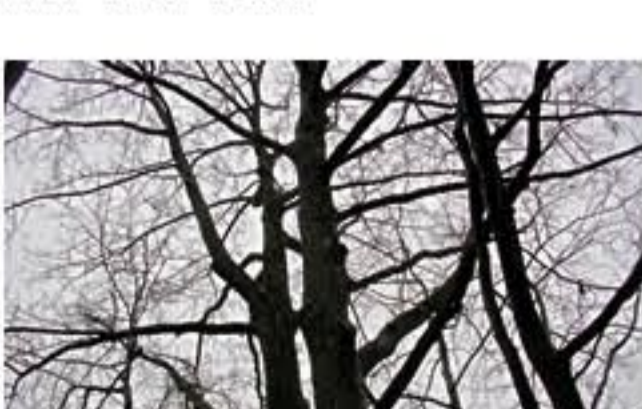
【スカシダワラ】



【ミズナラのどんぐり】

11月になると景色は一変。木々は全て葉を落とし、見上げると枝の間から灰色の空が見えました。

足元には色々な種類の落葉が敷き詰められ、その所々に見えるコケなどの緑色が鮮やかに見えています。しかし、他の季節に比べるとどうしても寂しい色調に感じられます。冬の訪れの兆候としては自然なことなのかもしれませんが、四季を通じて色を楽しめる森づくりを計画するのも良いかもしれません。



【葉を落とした木々】



【鮮やかな色彩の落ち葉】

そして一年の締めくくり12月の森は、森一面に雪が降り積もり一気に冬景色がやってきました。

2005年は全国的に記録的な豪雪に見舞われており、ベコちゃんの森にも人を寄せ付けぬほどの大雪が降り積もってしまいました。

森のほとんどを覆い尽くす雪の量はいつにも増して冬の厳しさを教えてくれます。

毎年同じようにやってくる冬も毎年違った顔を見せてくれるから自然は興味深いんですね。



【大雪に見舞われた森】